

# 保育者養成校におけるアンサンブルの指導

—ピアノ経験者による6手連弾の取り組み—

林 麻由美

The guidance of ensemble in childminder training  
The practice of 6 hands by piano experienced persons

Mayumi HAYASHI

6手連弾、アンサンブル、保育現場、ピアノ経験者、ピアノ演奏

## I. はじめに

保育者養成校のピアノの指導において、その初心者に向けての指導法についてはよく述べられているが、ピアノの経験者についてはどうであろうか？学生が授業で指定されている教材が既に学習済みであったり、また、初見でもこなせる程度の弾き歌い課題である場合、教員側もピアノが良く弾ける学生だからそれでよし、と処理してしまう場合が少なくないのではないか？

筆者は、ピアノ経験者たとえ上級の学生であっても、保育者養成校の音楽指導の中で、保育現場に必要なもっと沢山の新しい学びがあるのではないか、と考えている。ほとんどのピアノ経験者は、100%といってもよいほど、クラシック音楽の独奏スタイルを学んできたであろう。しかし、保育現場での音楽活動はその経験だけでは十分ではなく、アンサンブルの学習が必要だと考える。そして、ピアノ経験者の学生達が、たとえ難無く弾けるピアノ曲であっても、今の自分の実力にとどまらず、保育者として必要な音楽の勉強をもっ

としなければ、と思わせる音楽へのアプローチを教員側からも、もっと投げかけていく必要があるのではないか、と考える。

本稿では学内コンサートでのピアノ6手連弾曲を取り上げ、その指導とピアノ経験者である学生達の取り組みを通して保育現場での更なる音楽活動の可能性を考える。

## II. ふれあいピアノコンサート

本学は毎年12月に学生と教員による演奏会を開催している。学生はこれまでのピアノの経験は問わず、ステージを踏みたいという有志が中心で、演奏時間には3分程度と制限があるものの、演奏形態も独奏や連弾、曲目も、またジャンルも自由に選択できる。その準備期間には教員がサポートすることになっており、1人の教員が1～2組のレッスンを担当する。そして、2回の出演者全員のリハーサルを経て本番を迎える。

今回は筆者が担当した学生のうち1組が6手連弾を希望し、曲目はヨハン・シュトラウス1世(1804～49)の「ラデツキー行進曲」



6手ピアノ

## ラデツキー行進曲

こうしんきょく

譜例 1

作曲 J. シュトラウス I

Allegretto (♩=100)

10

に決定した。オーケストラ楽曲であるこの名曲を是非演奏したいという希望で、ピアノ6手連弾用に編曲されている楽譜(譜例1)を学生が用意してきた。それぞれのパートを見る限り、学生達にとっては、普段弾いているソロ用の譜面よりずっと簡単なものであることは一目瞭然であろう。

演奏メンバーは3人ともピアノ経験者であるが、これまでの経験について簡単なアンケートを取った。

\*Aさん(パートI、高音域担当)ピアノ学習歴8年。これまでに、ギロック、バイエル、ソナチネ等の教本を学習。発表会などの本番経験が4回。

\*Bさん(パートII、中音域担当)ピアノ学習歴2年。これまで学習した主な教本はバイエル、ブルグミュラー、ツェルニー、ハノンなど。発表会などの本番経験3回。

\*Cさん(パートIII、低音域担当)ピアノ学習歴17年。これまでに学習した主な教本はハノン、ツェルニー、バイエル、ソナチネなど。発表会などの本番経験は多数有る。

### III. 演奏会に向けての準備

#### ① 原曲を聴く

オーケストラ楽曲である「ラデツキー行進曲」が毎年ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のニューイヤーコンサート

# Radetzky-Marsch

ラデツキー行進曲

譜例 2

Johann Strauss Vater

で演奏される映像は一度観ておく必要性がある。レッスン時に実際の映像を観てもらい、以下の点を確認した。

- \* 会場の雰囲気はどんな感じであるか
- \* お客様の手拍子とともに曲が演奏されている。
- \* 曲の中間部では手拍子はストップするように指揮者が指示している。
- \* 曲冒頭は小太鼓の軽快なリズムで始まるっている。

## ② スコアを見る（譜例 2）

実際のオーケストラの響きがどのように構成されているか、スコアの一部を提示した。3人とも珍しいものを見るかのような表情であったが大変興味を示していた。もちろん筆者もオーケストラスコアを普段見ることはほとんどない。スコアの左に記入されている楽器を確認する。

\* Corni → ホルン、

\* Trombe → トランペット、

\* Gran Cassa → 大だいこ

\* Tamburo → たいこ、

などの普段聞き慣れない楽器表記について確認した。次に、

\* クラリネット、ホルン、トランペット  
の調号が原調（二長調）ではない。→  
移調楽器である。

\* ヴィオラパートがアルト記号で書か  
れている。→ ト音記号、ヘ音記号の他  
にもアルト記号、ソプラノ記号、テノー  
ール記号など1点ハを示す音部記号があ  
る。

以上の点を確認した。これらの事柄は音  
楽経験がより豊かになるので、知識とし  
て頭の片隅にでも置いておけるとよいで  
あらうと判断して話をした。

### ③ 楽曲の中間部演奏についての考案

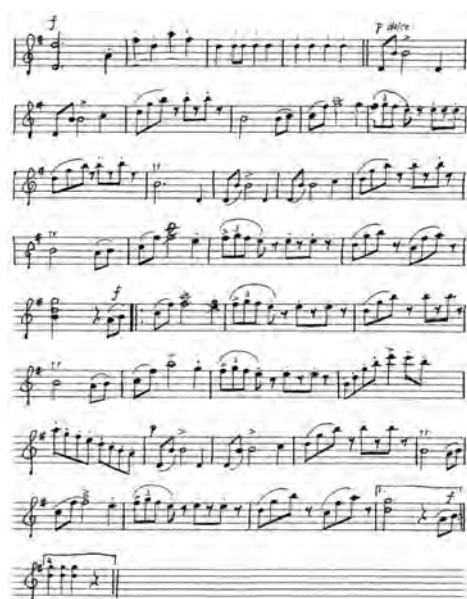
実は、今回使用した6手連弾用に編曲  
された楽譜は、曲の中間部分が存在して  
いない。このまま演奏すると、時間的に  
も1分半程度で終了してしまう。そこで、曲  
の中間部分も是非演奏したいとの学生の  
希望もあり、中間部を入れた完全な形に  
していこうと決めた。

その方法について述べる。まず、スコ  
アの最後にピアノソロ用に編曲された楽  
譜が掲載されており、これを学生に提示  
した。パートⅠとⅢの学生はそれぞれピ  
アノソロ楽譜の右手と左手の部分を担当  
すればよいと判断した。これは一番簡単  
な方法である。しかし、実はこの6手連  
弾譜は、ハ長調に編曲されており、原曲

の二長調の譜面から移調しなければなら  
ない。筆者は、二人にピアノソロ楽譜か  
ら個々のパートを移調して五線譜に書い  
てみるよう指示した。ピアノの初心者には  
できないことかもしれないが、ある程  
度の経験者には、楽譜を書く作業や移調  
することなども経験していたほうが今後  
のためにもなると判断したからである。  
それぞれの学生が書いてきた譜面を載せ  
る。

学生が作成してきた楽譜にはその記譜  
法にいくつかの間違いが見られ訂正した。  
訂正前の譜面を載せる。

(パートⅠ)



学生達にとって楽譜を書く作業は、貴  
重な経験であったと思う。就職先の保育  
園や幼稚園でもきっと役立つであろう。  
実際、毎年学生達が実習先から渡される  
手書きの楽譜の中には、間違いだらけの



ものも少なくない。就職先で、このようなことにならないようにしたいものである。

(パートⅢ)



さて、パートⅡの演奏部分については、筆者がスコアからトランペットのパートを抜き出し、こちらは移調楽器であるため実音を提示し、これも本人に五線譜に書くよう指示した。

(パートⅡ)



#### ④ 連弾についての指導

ピアノ専攻である筆者は、1999年から約10年間、当時武蔵野音楽大学の客員教授コンスタンティン・ガネフ氏に連弾、ピアノ二重奏を師事していた。この間に2回のピアノデュオリサイタルを開催した。共演者は大学時代の友人、大石あかね氏で、現在も細々ではあるが活動を続けている。当時の教授のレッスンで印象的だったことの一つには、ガネフ教授によると、

「連弾は個々が弾けるようになってから合わせるのではなく、最初から片手ずつ合わせていく方法が良い」と話されていたことである。

お互いの右手だけ、左手だけ合わせる。それから、お互いが違う方の手を弾く。プリモ（高音部担当）の左手とセコンド（低音部担当）の右手はぶつかる事が多々あるので、どちらが鍵盤の奥で弾くか、または手前で弾くかなどの演奏する時のルールを決める。

このような練習方法を採用すると、相手の音が良く聴こえてくるようになると同時に、相手の音を積極的に聴くようになる。当然片手同士であるから、より聴きやすくなるのである。

筆者はまず学生にこの練習方法を伝えた。当初学生たちは、この6手連弾の譜面を見る限りは、1人1人のパートはかなりシンプルで、すぐに仕上がりそうだと思っていたに違いない。少し物足りないかもしれない、とまで言う者もいた。この練習方法について、学生は初めはピ

ンとこなかったようなので、実際のレッスンで、筆者の誘導のもとに実施した。

- \*それぞれのパートの片手を弾く
- \*同じ旋律を弾いているパートだけ弾く
- \*Ⅲのパートの左手とⅠのパートの右手  
即ち外側の声部だけ弾き、曲の輪郭を把握する。

\*主旋律以外の部分を弾く、

以上の点を提示しその場で実践した結果、学生達はほんの一部分でも、整然となるまでにはかなり時間がかかることが分かっていた。その結果、次第に自分達だけで話し合い、練習を進めるようになっていった。これは、筆者にとっても嬉しいことであった。その中で、素朴な疑問点が出された。「なぜ、3人がなかなか合わないのか」であった。この質問に対しては、

\*ABAの構成であるこの曲のA部分とB部分のそれぞれの拍子感に3人が共通のイメージを持つ。具体的にはA部分は縦方向の2拍子、B部分は横に揺れるような2拍子をイメージする。

\*音の方向性や、フレーズについての説明や個々の細かいアーティキュレーションについても伝え、実際筆者が弾いて見せた。

\*合わない箇所は、どのパートを聴いて弾くべきなのかを知ることが大切である。

以上のようなアドヴァイスをした。

学生達はこれらを真剣に受け入れて取り組んでくれたので、回数を重ねるごとに見事に上達していった。

自分のパートをそれぞれが数えて弾いて音だけを合わせるのではなく、相手の音に自分の音をどう重ねるか、またはもぐらせるのかなど、耳をどう働かせるのかということが次第に解ってきたようだった。そして、2回のリハーサルも演奏を録音してその後の対策を立て、自分達で前向きな取り組みを見せていった。

#### IV. 演奏会とその後

演奏会当日は、会場にて1組5分程度のリハーサルが出来る。曲全体1回通して演奏できると同時に、残った時間をどう使うのかという話し合いもされていた。その結果、気になる箇所、曲の出だし、曲の終わり方についてが確認された。ピアノのタッチも、ホールの響きも初めての経験、さらに緊張もしているので、普段練習しているようにはならないことは誰もが承知である。

また、リハーサル直後の学生からこんな質問が飛んできた。「笑顔で舞台に出ても良いんですか?」と。筆者は正直驚いたが、「もちろんです」と即座に答え、またこう付け足した。それは、ガネフ教授の言葉である。「こういう演奏会のスタイルをアミューズというのです。試験ではないのですよ。会場は温かい空気に包まれています」と。そして演奏者はもとより、お客様に楽しんでいただくことが何より大切なのであることを伝えた。

さて本番はどうであったかというと、今までで一番良い演奏であったことは間違い無い。演奏を終えた学生達の満足そうな表情からも、それがうかがえた。その上、ステージでの本

番の演奏を楽しめたとまでも言っていた。以下は、学生達の6手連弾を経験した感想である。

(原文のまま)

初めて3人で弾き、最初はできる、と思っていましたが、いざやってみると難しく、なかなか合わせることができませんでした。2人の連弾より多く弾かないといけないことを知り、時間があるときは練習をしました。本番で初めて3人でノーミスで弾くことができ、嬉しく、良い経験になりました。

4手連弾は今まで一度、妹と経験したのですが、妹だったから練習する機会も多く、暇があればすぐに練習をすることができました。ですが、6手連弾は初めてで、練習もなかなかできず、一人が予定があると合わせる事が難しくなり練習があまりできなかったことが難しかったです。練習でもリハーサルでも足を引っ張ってしまったので本番は不安でしたが、笑顔で楽しく弾くことができ感動しています。

初めて3人で弾き、最初はできる、と思っていましたが、いざやってみると難しく、なかなか合わせることができませんでした。2人の連弾より多く弾かないといけないことを知り、時間があるときは練習をしました。本番で初めて3人でノーミスで弾くことができ、嬉しく、良い経験になりました。

## V. まとめ

ピアノ連弾は、手早く行うことができるアンサンブルである。アンサンブルを学ぶことは音楽を学ぶ上でとても重要である。保育現場での音楽活動もそのほとんどが、アンサンブルにより成り立っていると言える。今回の6手連弾の経験から、1つの曲を多方面からアプローチしていくことにより、曲をより深く追求することができた。個々のパートはシンプルな形であっても全員で合わせるとなると段階的な練習が必要で、時間がかかる。様々な方法で耳を良く使い、相手の存在を知ることにより、より良いアンサンブルに導いていけることも分かった。また、スコアや楽器について、さらに楽典の領域まで意識を向ける事が出来た。このような経験がピアノ経験者であるなら、更にいっそう保育現場での音楽活動を豊かにすることが出来るであろうし、ピアノ経験者だからこそ、書かれた楽譜だけにしがみつて演奏するだけではなく、もっと視野を広げたアイデアを模索し、保育現場をよりいっそう楽しく盛り上げていけるであろう。それゆえ、ピアノの経験者でもアンサンブルは新しい学びであるということを意識してほしい。保育者養成における最も重要な課題である弾き歌いについても、同じことが言える。弾き歌いは、ピアノ演奏の延長ではなく、アンサンブルの新しい学びの一つであると考えたほうがよいのではないか。なぜなら、自身で弾き歌いをするが、歌と伴奏の両方、どちらかというと歌が主体で、その下にピアノの伴奏を潜り込ませるような耳の使い方をする点が、アンサブルの耳の使い方に近いとい

える。したがって弾き歌いの練習も、右手だけ、左手だけ、歌だけと、別々に練習した後に、右手+歌、左手+歌と分けて練習をするべきである。即ち、ピアノ経験者も、弾き歌いを保育者養成校での新しい学びの一つと捉え学習すべきであると考ええる。

今回の6手連弾の試みから、ピアノ経験者がアンサンブルの力を高めることによって、保育現場での音楽活動のリーダーとなり、より豊かな音楽活動を作り上げることが可能になるとともに、このアンサンブルの力を高めることが弾き歌いの技術向上にもつながると考察した。そして、我々教官側もすべての学生に対し、常に保育現場の音楽活動を想定した授業内容を行っていくことが必要であると考ええる。

#### 〔使用楽譜〕

ラデツキー行進曲 ポケットスコア

(日本楽譜出版社)

譜めくりのいないピアノれんだん2

(yamaha music media corporation)